

3歳児の親の育児に関する悩み

—奈良県における最近10年間のアンケート調査から—

今井道子

(武庫川女子大学文学部教育学科)

A Research on Worries and Anxieties of Child Care in Parents of Three-year-old Children

—An Analysis of Questionnaire Made in Nara
Prefecture During these 10 years—

Michiko Imai

Department of Education

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

はじめに

最近、児童相談所や病院における子どもの心身の健康に関する相談が急激に増加している。こうした専門機関の他に、ラジオや電話による親の悩みの相談も年々多くなってきている。とりわけ核家族の親の悩みは深刻である。三世大家族同居という場合には、子育てについて困った時に相談する相手がいるし、子どものことで家族同士が話し合えるので、お互いの気持ちを理解する機会を積極的に持つことができる。

ところが、都市においては、特に核家族化による孤立が一般的になってきており、育児の途中で不安や悩みがあるとしても、身近に専門家や助言者がいないために、それらを積極的に解決させる方向へもっていくことは困難である。

このように、核家族化が子どもの養育にあたる若年の親たちに深刻な影響を及ぼしつつあるいっぽうで、1970年代半ばより子どもの出生率は低下するばかりで、ついに一夫婦あたりの子どもの数は2人前後になった。このことがまた家族集団のダイナミクスに変化をもたらし、子どもの情緒的な問題を生じさせる原因ともなっている。

さらに、近年、働く女性が増加し、今日では、雇用者として働く女性は全体の60%を占め、1300万人以上にのぼっている。こうした状況の中で、乳幼児を持つ母親が職業をもって働き続けることの困難さはいうまでもない。職業生活と家庭生活の二重の負担からくる身体的・時間的困難はもとより、多くの母親たちを悩ませているのは、「育児は母親の仕事」というわが国の社会通念である。具体的には、「子どもが幼いうちは母親が育てるべきだ」、「乳児期から保育園や他人に子どもを預けるのは、子どもの健全な成長のためによくない」といった主張や非難が、働く母親たちの気持ちを挫き、罪障感をつのらせ、不安をかきたてる。

特に、子どもに何か問題が生じた場合、母親の就労そのものが原因であるかのように指摘されることも少なくない。働いている母親だからこそ子どもに対しては、ゆったりと接する心のゆとりが、必要であるのに、日日の精神的負担は、逆に子育てに悪い影響を及ぼす結果を招いている。

こうした傾向が強まれば、極端な場合には、育児ノイローゼや子殺しなどの不幸な事件を発生させる引き金になる。

しかしながら、牧野^{1,2}の研究によれば、母親が働いていても、夫が子育てに協力している場合には、妻は育

児に満足感を持てる、子どもと離れる時間があるため、大勢の人が一緒に子どもを育ててくれているという気持ちを持てるなどの理由から、育児不安が低いことが明らかにされている。また木村³の研究では、専業主婦においても、母親の役割以外に、仕事や趣味活動あるいは社会活動に多くの関わりをもっている者はやはり育児不安が低いことが報告されている。これらの事実は、母親たちの子育ての悩みや育児不安を軽減させる方路を示唆するものとして興味深い。

いずれにしても、今日のような多くの母親が育児に関して悩みを持っている現状に適切に対処するためには、やはり、子どもの問題をできるだけ早期に発見し、早期に解決する機会を提供することが必要である。それとともに、日々の育児における予防的な対策も重視すべきであると考ええる。

そこで本研究では、3歳児をもつ親が育児に関してどのような悩みや不安を抱えているか、その実態を明らかにするために、10年間にわたるアンケート調査から得られた貴重なデータをもとに、子育てに関する悩みの分析を行なった。

方 法

本研究は、奈良県家庭教育（幼児期）相談事業の一環として実施された「親の悩みについてのアンケート調査」より、昭和54年度～63年度の10年間の資料を主管の県教委社会教育課の承諾を得て使用した。なおこの事業は、幼児教育のあり方が人間形成に大きな影響力をもつことにかんがみ、県が国の補助を受けて3歳児を第一子にもつ親（またはこれに準ずる者）に対し、通信によって家庭教育に関する情報を提供するとともに、巡回やテレビ放送によって相談・指導を行う目的で実施されてきた。しかし、平成元年度より、新しい組織の「すこやか家庭教育相談事業」にひきつがれ、対象者も県下の乳幼児を持つ親等となった。

1. 調査の対象 奈良県下に在住し、3歳児を第1子にもつ親等

Table 1 Distribution of subjects by years

年 度	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
対 象 者 数	8,059	8,248	7,750	8,253	7,454	7,250	7,644	7,523	7,391	6,721

2. 調査の方法 各家庭に送付する通信（封書）にアンケート用のはがきを同封し、郵送により回収する。
3. 調査内容 28項目（ただし、一部中途で削除または追加されている）の質問事項のうち、該当するものに制限なしで○をつけていく。アンケートの回収率は表2のとおり

Table 2 Percentage of ansers for the questionnaire

年 度	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平均
回収率	31.4	27.4	25.7	19.2	15.7	19.1	19.5	25.0	23.1	24.8	23.1

結果と考察

1. 全体的考察

まず10年間のデータを概観すると、領域別、項目別の数値が極めて似かよっていることがわかる。とりわけ食事面と情緒面に悩みが多く集中している傾向は一貫している。

いっぽう、育児に対して何の不安も悩みもないと答えた親は、10年間を通して10%以下に止まっている。途中この項目についてのデータが記入されていない年度もあるが、上述したように、回答者の平均が1995人とすると、毎年約100名から200名の親が自分の子育てに不安を感じていないという事実をどう解釈すべきであろう

3歳児の親の育児に関する悩み（今井）

か。この激動の社会の中で文字どおり育児に全く不安がないと答えられる親は幸福であると受けとめるべきであろうが、その中には子育ての意義や母親の役割の重大さに十分気づいていなかったり、あえて現実の問題から逃避している親もいることが考えられる。

Table 3 Percentage of answers in every items during 10 years

項目	年度										
	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平均
食べものに好ききらいが多い	29.3	29.6	22.2	23.9	22.7	22.7	23.4	25.8	28.2	26.0	25.4
ご飯時の食事の量が少い	38.6	37.8	31.2	35.5	35.8	32.7	33.8	33.6	34.4	28.9	34.2
食事に時間がかかる	29.1	30.8	25.4	29.6	28.3	28.2	28.9	31.5	30.8	28.1	29.1
ほ乳ビンをはなさない	12.7	10.4	7.0	7.6	5.9	6.0	5.9	4.8	5.2	4.8	7.0
寝つきがわるい	7.9	8.2	7.1	9.1	8.4	8.1	9.4	8.9	9.3	9.1	8.6
指しゃぶりをする	22.8	21.0	17.8	21.7	22.6	22.4	21.8	19.7	22.0	20.7	21.3
夜尿（おねしょ）をする	17.6	17.9	15.5	18.7	16.3	13.6	15.9	17.1	16.0	14.7	16.3
発育がわるい	2.9	3.3	2.8	2.4	3.4	2.8	2.8	3.0	2.4	1.9	2.8
身体が弱くてすぐ病気をする	2.1	2.4	1.5	2.7	1.	2.9	1.3	1.5	2.1	1.1	2.1
おなかをこわしやすい	2.8	2.4	1.6	2.3	82.7	2.1	2.6	2.7	3.2	2.8	2.5
すぐ熱を出す	4.3	5.3	2.1	4.8	3.5	4.9	3.9	5.3	5.7	5.9	4.6
ひきつけをおこしやすい	0.9	1.4	0.9	1.8	1.3	1.1	1.1	1.1	1.6	1.0	1.2
性器いじりをして困る	5.6	5.2	3.9	6.4	5.2	6.3	5.6	5.3	4.8	6.2	5.5
ことばがおくれている	8.4	7.9	6.2	9.5	8.4	7.9	5.7	6.1	5.6	7.0	7.3
話すときどもる	3.6	2.2	1.8	2.3	2.2	2.5	2.3	1.8	2.5	3.0	2.4
発音をはっきりしない	8.1	8.3	5.9	7.9	7.6	6.9	5.5	6.2	7.3	6.2	7.0
友だちと遊べない	6.5	5.6	3.8	7.8	5.4	6.3	5.4	6.6	6.7	4.5	5.9
外で遊びたがらない	1.6	1.6	1.0	1.5	1.3	1.1	0.8	1.0	1.0	0.7	1.2
いじわるをする	13.1	11.7	8.6	11.3	11.0	11.1	10.3	9.7	12.7	10.2	11.0
神経質である	14.2	15.5	10.5	13.2	14.5	14.1	15.8	16.5	16.3	14.0	14.5
内気でひっこみじあんである	13.2	13.4	8.9	12.1	12.2	10.2	12.5	12.7	13.1	11.8	12.0
よく甘える	30.7	30.9	26.1	33.3	30.7	29.2	26.8	27.5	31.6	28.3	29.5
わがままである	33.4	29.3	22.6	30.3	27.5	25.3	25.7	26.4	28.1	28.7	27.7
よく泣く	28.9	26.5	19.8	27.2	25.2	26.3	24.6	23.6	26.6	23.2	25.2
皮膚が弱い				23.0	23.7	22.2	23.8	24.8	26.8	25.1	24.2
ころびやすい					10.5	8.4	8.0	8.4	9.8	9.1	9.0
落ちつきがない						17.1	13.3	13.2	12.7	14.6	14.2
そのほか気になること	37.9	26.1					7.9	17.5	18.8	18.4	21.1
気になることなし	10.6	4.2					8.3	9.6	6.8	8.4	8.0

2. 領域別の検討

1. 食事面

アンケートの項目の中で、食事についての数値が最も高い。驚くべきことに10年間常にトップを占めているのである。これは、裏返せば我が子が何でも食べて丈夫に育ってほしいという親の切なる願いを表わしているとも言えよう。しかし、それにしても幼児の1日の食生活に対する親の姿勢が問題なのではないだろうか。子どもに食べ物や飲み物を与える場合、親は子どもの生活全般のリズムに気を配らねばならない。幼児の飲食について母親に質問してみると、子どもが要求するままに、間食をさせているという答が多く返ってくる。実際、最近の親は、スーパー等で購入したスナック類を袋のまま子どもに与えているし、ジュースをせがまれば、量もその中の含有物をも考慮することなく子どもの飲みたいものを好きなだけ与えているのである。常に高血糖値のため満腹感にひたっている子どもに食事を強いても食が進まないのは無理からぬことであろう。「少ししか食べてくれない」という親の訴えには、子どもが食事をしっかりとらないと、丈夫に育たないのではないかと、という漠然とした不安と、せっかく作ったのに喜んで食べてくれないという不満とが混入しているように思われる。ここで一番の問題は、「少ししか食べない」子どもの状態ではなくて、親自身が日常子どもが食事をしっかりとれないような養育をしていながら、その点を洞察できないでいること、また、子どもに対する食事のつけ方が望ましくないと気づいていながら、改善のための実行力に欠けていることではないだろうか。糖分がどれほど食欲を減退させる要素を含んでいるかを親が認識しなければ、この問題は根本的に解決しないのではないと思われる。このことに関連して、幼児の成長の度合いという観点から考えてみると、標準体重は1才で9kg、4才で16kgであるから、3年間で6kgしか増加しないのである。つまり、平均すると1年間に2kg増加すればよい計算となる。それゆえこの時期の食事の量は、そう増えるものではなく、食事によって生産されたエネルギーは、そのほとんどが活動の方へまわるのである。むしろ親が食事の量の多少を決める時の尺度がどこからきているのかが問題になろう。おそらく、1、2歳児に食べていた量と比べると、体が大きくなった現在の量が変らないと感じたり、育ちざかりの学童期の子どもたちに比べると少ないと思っているのではないだろうか。食事は、量より質を重視し、間食の与え方を工夫すると同時に、戸外での遊びを多くして空腹感を持たせるなどの点を考慮し、生活のリズムを整えていくことが大切であろう。

2. 情緒面

「よく甘える」という悩みが10年間常にトップにあり、次に「わがまま」が僅かの差で続いている。このデータから見ると、親は乳幼児の特質や、この時期の心身の発達過程を十分に理解しないままに、あやまった知識をもとに育児を行っているような印象を受ける。本研究の調査対象は、その年度に満3歳になる幼児だから実際には2歳から3歳である。まだ母親のふところが恋しく、遊びも母親の膝を基地として発達していく年齢である。しかも、子どもが3歳近くなると、母親は第2子を妊娠していたり、出産直後だったりする。それまで自分一人だけの母親だったものが、突然その座を追われるのであるから、子どもはどんなに自分の立ち場を不安に思い寂しさを感じるのだらうか。その気持が逆に激しく母親を求めるようになる。これが甘えの要因なのだが、しかし心のどこかでは、長子としての運命を受け止めていく心がまえも形成されつつある頃である。そしてこのように母親に甘えていた反面、そろそろ自立が芽生え、心理的離乳も始まって自己主張が強くなる。これがいわゆる反抗期の現象である。

ことわざに、「3歳は足あとまでも憎らしい」とあるが、自己主張をはじめた子どもは親から見れば我がままとしか云いようのない反抗を示す。親が命令すると「イヤ」という言葉が返ってくるのもこの頃からである。だからといって親が本気で拒否的態度に出ると大あわてで泣き叫ぶという状態がしばらく続く。この幼児の内から突き上げてくる心理的葛藤が、親から見るとがまんのならぬ「わがまま」に見えてくる。特に第1子の行動は親にとって初めての経験であるだけに、これが子どもの成長過程における大切な行動の一つであることを認識してほしいものである。

3. 身体面

この問題領域の中では、「皮膚が弱い」という項目が非常に高い数値を示している。幼児の皮膚は、角質層が薄く、ちょっと虫に刺されても赤く腫れあがったり、傷がついて化膿したりしやすい。最近では冷暖房完備の家庭も多くなったため、霜やけやあせもなどが減ってきた反面、アトピー性の皮膚炎が多くなってきているのが

3 歳児の親の育児に関する悩み（今井）

親の悩みの種である。いっぽう「身体が弱くて病気になりやすい」は、昭和60年以降減少しはじめている。これは、親の妊娠に対する知識が向上し、丈夫な子どもが生まれ、虚弱体質の子どもが減少してきている証拠ではないだろうか。しかし、その反面「発育がよくない」という悩みが10年間変化がなく、平均2.8%前後である。同じく「おなかをこわししやすい」は変化がないが、「熱を出しやすい」が少しではあるが年々増加してきている。寝冷えによる発熱などのように、親が夜中に子どもの布団を掛けるのを忘れて寝入ってしまったというケースもあるように、親の不注意が原因となっている発熱もあると思われる。次に「ころびやすい」の項目は6年間を通じて9%台を示している。まだ足も腰も弱く、しっかりと大地を踏みしめることもできない頭の大きな幼児は、バランスがとりにくく、すぐ転んでも不思議ではないと思う。しかし、一つの懸念は、乳児期の運動、特に這い這いをしないうまま立ち歩きをしてしまう最近の子どもの問題がこういう形で表面化してきたのではないかと、ということである。小中学生などに見られる骨折の増加などと考え合わせると、クルマ時代に生まれ育って歩かなくなった現代の幼児には、これからも増える確率の高い問題項目と言えよう。

4 言語面

「ことばがおくれている」と感じている親は毎年同じくらいの割合を占めている。また「発音がはっきりしない」と心配する親もほとんど同様の数値を示していることに注目したい。3歳の後半あたりは、普通は800～900の語いを駆使して一生懸命話そうとする時期である。言語の発達は個人差が大きく、簡単にことばが遅れているとの断定はできないが、喃語期に親が十分に応答しなかった、とか、発語期に十分な言語的刺激を与えることをしなかった、というようなことがことばの遅れる原因となっているかもしれない。

5 しつけ・くせ

「ほ乳びんを離さない」の項目を見ると、50年代前半まではほ乳びんを与えているが、56年以降は年毎にはほ乳びんや乳首を与える親が減ってきている。それに対して指しゃぶりは、この10年間数値がほとんど変わらず20%を越えている。このことは、ほ乳びんを与えられなくても子どもは指しゃぶりだけで十分欲求不満を解消しようと云える。千石保⁴の研究によれば、アメリカにおける母子挙動観察調査において、アメリカの乳児の指しゃぶりの激減の原因は食事の回数が増えたことにあると報告されている。日本の幼児の場合、生理的空腹感があるとは考えられない。だとしたらこれは乳児期の指しゃぶりの単なる延長か精神的空腹、すなわち欲求不満の表出ではないだろうか。指しゃぶりは一過性のくせではあるが、この時期の精神的な欲求不満は性格も変えてしまうこともあるので、幼児の心を満たしてあげるよう心すべきである。

次に「寝つきが悪い」はこの10年間で増加傾向を示している問題項目の一つである。こんなに小さな幼児にまで夜ふかし型の生活が広がってきた表われであろうか。このような家庭は、家庭全体が夜遅く、一晩くらいは一緒に起きていてもいいだろうという親の甘い考えが、いつの間にか習慣化し、おそ寝おそ起きの生活リズムがついてしまったと思われる。また間取りの少ないアパートや団地の居住条件から子どもに十分な睡眠を与えられないという原因も考えられる。いずれにしても、夜9時になったら部屋を暗くして床に入る習慣をつけるなどの方法をとらなければ、解決しない問題である。

3. 3年間隔でみた親の悩みの傾向

10年間のデータをさらに3年ごとのブロックにしてその特徴を分析してみたものが図1である。

悩みの多い順位は既に検討してきた全体の傾向とほとんど変わっていないのがわかる。また4つのブロックごとに比較すると、年が進むにつれて数値が低くなってきているものが目立つ。その反面、「皮膚が弱い」、「寝つきが悪い」など数値の上昇度が著しい項目のあることが注目される。こうしたところに現代の生活環境の一つの特徴がはっきり出ていると云えるのではないだろうか。

4. 祖父母との同居別居の比較

ここでは昭和60年度より63年度までの4年間のデータをもとに、祖父母と同居している場合と別居している場合とでは、どのような差異があるかを調べてみた。(表4参照)

親の悩みについての全体的な頻度傾向は、10年間のデータから得られたそれと大差はないが、領域毎には同居と別居別にかかなりの差が見られるので主要なものだけに限定して検討を行う。

項目	%					%			
	10	20	30	40		5	10	15	20
ご飯時の食事の量が少い	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				ころびやすい	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
よく甘える	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				寝つきがわるい	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
食事に時間がかかる	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				ことばがおくれている	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
わがままである	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				ほ乳ビンをはなさない	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
食べ物に好ききらいが多い	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				発音をはっきりしない	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
よく泣く	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				友だちと遊べない	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
皮膚が弱い	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				性器いじりをして困る	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
指しゃぶりをする	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				すぐ熱を出す	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
夜尿(おねしょ)をする	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				発音をはっきりしない	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
神経質である	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				おなかをこわしやすい	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
落ちつきがない	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				身体が弱くてすぐ病気になる	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
内気でひっこみじあんである	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				外で遊びたがない	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			
いじわるをする	[Horizontal bars for 10, 20, 30, 40%]				ひきつけをおこしやすい	[Horizontal bars for 5, 10, 15, 20%]			

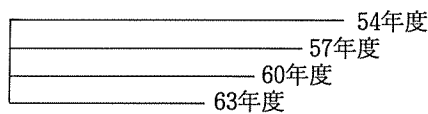


Fig. 1 Changes of percentage of answers in every three years

3歳児の親の育児に関する悩み（今井）

Table 4 Comparisons of percentage of answers which were made by the family living with the aged and apart from them

年度 項目	同居				別居				同居	別居
	60	61	62	63	60	61	62	63	平均	平均
食べものに好ききらいが多い	29.1	28.0	30.5	27.4	17.6	23.5	25.8	24.5	28.8	22.9
ご飯時の食事の量が少い	37.2	36.5	34.1	29.1	30.3	30.6	34.6	28.7	34.2	31.1
食事に時間がかかる	29.9	32.2	28.0	24.0	27.8	30.7	33.5	32.1	28.5	31.0
は乳ビンをはなさない	8.6	5.5	7.4	4.4	3.2	4.0	2.9	5.2	6.5	3.8
寝つきがわるい	10.9	9.7	10.0	10.6	7.8	8.0	8.6	7.5	10.3	6.2
指しゃぶりをする	24.8	19.6	20.2	19.9	18.7	19.7	23.7	21.5	21.1	20.9
夜尿（おねしょ）をする	20.2	17.5	14.7	14.5	11.6	16.7	17.3	14.9	16.7	15.1
発育がわるい	3.1	3.1	1.6	0.9	2.4	2.8	3.1	2.8	2.2	2.8
身体が弱くてすぐ病気を	1.0	1.6	1.2	1.2	1.5	1.4	2.9	0.9	1.3	1.7
おなかをこわしやすい	2.6	2.7	2.9	2.9	2.5	2.7	3.4	2.6	2.8	2.8
すぐ熱を出す	1.7	4.7	4.3	4.9	6.1	5.8	7.1	6.8	3.9	6.5
ひきつけをおこしやすい	0.8	0.8	1.2	1.1	1.4	1.4	1.9	1.0	1.0	1.4
性器いじりをして困る	4.8	5.7	5.9	6.7	6.4	4.9	3.6	5.7	5.8	5.2
ことばがおくれている	6.1	4.7	4.6	6.3	5.2	7.4	6.6	7.0	5.4	6.7
話すときどもる	3.6	1.5	2.9	4.0	0.9	2.0	2.0	1.9	3.0	1.7
発音がはっきりしない	5.0	5.4	5.6	6.1	6.0	6.9	9.0	6.3	5.5	7.1
友だちと遊べない	7.1	8.1	7.1	5.0	3.6	5.1	6.2	4.0	6.8	4.7
外で遊びたがらない	0.3	1.0	1.2	0.5	1.2	1.0	0.8	0.9	0.8	1.0
いじわるをする	12.1	10.0	12.6	11.3	8.4	9.3	12.8	9.0	11.5	9.9
神経質である	17.2	17.2	16.2	14.4	14.3	15.8	16.4	13.6	16.3	15.0
内気でひっこみじあんである	12.6	12.9	13.4	11.9	12.5	12.4	12.7	11.7	12.7	11.2
よく甘える	31.4	33.0	36.0	33.0	22.1	22.0	27.1	23.5	33.4	23.7
わがままである	30.7	30.2	31.2	35.9	20.7	22.6	24.9	21.4	32.0	22.4
よく泣く	27.4	26.3	28.6	25.5	21.8	20.8	24.5	20.8	27.0	22.0
皮膚が弱い	24.3	27.3	26.2	24.2	23.3	22.2	27.3	26.0	25.5	24.7
ころびやすい	8.9	8.8	10.0	8.9	7.1	8.1	9.6	9.3	9.2	8.5
落ちつきがない	16.7	13.9	15.0	17.1	9.8	12.4	10.3	12.0	15.8	11.1
そのほか気になること	8.4	19.4	18.2	19.1	7.3	15.6	19.3	17.6	16.3	15.0
気になることなし	6.0	8.7	5.2	8.1	10.6	10.4	8.4	8.7	5.8	7.4

1 食事面

「食事の量が少ない」という親の心配は祖父母との別居，同居を問わず高い数値を示している。まず「食事の量が少ない」や「食べるのに時間がかかる」が多いのは別居で，同居の場合には「好ききらいが多い」が目立つ。祖父母と別居している場合には，食べ物の好ききらいを言わないかわりに量が少なく，その上食べるのに時間がかかるようである。

2 情緒面

祖父母と同居の場合，「甘える」，「わがまま」，「泣く」の頻度数が，別居を大きく上まわっているのが目立つ。これは祖父母が，孫が可愛いくてつい甘やかしており，それを親が強く云えないところに同居の悩みが出てきているようである。実際アンケート回答用紙の自由記述欄に「祖父母が子どもを可愛がり過ぎてわがままになっていくのだが，嫁として，せっかく子どもを可愛いがっているのに，不服を云えば家庭がまずくなるので云うわけにもいかず悩んでいる」という訴えがあった。お年寄りと同居の嫁は，家庭の中で，若い世代の育児の方針を強く主張することは控えている実態が伺える。奈良という一般的には保守的な色彩の濃い土地柄を考慮すれば上述の傾向はいっそう強いかもしれない。

3 身体面

ここではわずかながら別居の場合の頻度数が同居を上まわっている項目がある。「すぐ熱を出す」や「発育が悪い」，「からだ弱い」，「ひきつけをおこす」などである。一般に子どもの日常の身体発達や健康管理の面については祖父母の援助に頼る率が高いが，別居だと特に母親の負担が大きく，それが上記のような項目に関し悩みを訴えとなっていると思われる。

4 言語面

言語についても僅かの差ではあるが，別居の子どもに発音の不明瞭や，ことばのおくれの悩みが多く出されている。同居家族の場合は，当然のことながら子どもの話し相手になれる人物が多くなる。特に，幼児の場合は祖父母を話し相手とした会話ができるので言語の発達上このことは大きな利点となる。10年間の平均値で比べると，「ことばの遅れ」，「発音がはっきりしない」が，別居の場合が7.3%と7.0%であるのに対し，同居の場合は，5.4%と5.5%と少なく，上述のような推測を裏づけている。

5 しつけ・くせ

祖父母同居の場合，「寝つきがわるい」という項目は全体の平均値より，3%高くなっている。親自身は子どもを早く寝かせたいと思っても，祖父母同居だとたくさんの大人が起きていて，つい子どもを相手にひとときを過すという雰囲気があるのであろう。この他，「ほ乳びんを離さない」とか，「指しゃぶりをする」なども同居の子どもに多く，このような点に年寄りとの同居に否定的考えを生む土壤があると考えられる。

6 その他

最後に，「悩みがない」という項目について簡単にふれておきたい。まず別居家族では7.4%の数値で，これは10年の平均値とほぼ同じであるが，同居家族では，5.8%となっている。その差は僅かではあるとはいえ，祖父母と同居のほうが子育てに関する悩みが多いという事実は，これからの高齢化社会迎えるにあたって，乳幼児の保育にたずさわる者が真剣にとりくまねばならない一つの重大な課題を示唆しているように思われる。

なお表5には，同居・別居によって差の見られる項目を10位まで掲げた。

以上3歳児を持つ親の悩みについて10年間の資料をまとめ，考察を行ってみたが，全般的に親が子どもの行動に神経質になりすぎているのではないかという印象がぬぐえない。2～3歳の幼い子どもは，まだ親の期待や予想通りには行動できない発達段階にあるということを十分に理解し，ゆとりをもって接していかなければ育児に関する不必要な悩みや心配は増加することはあっても，減少することはないと思われる。子どもの将来性，可塑性を信じ，他児との比較をやめ，我が子の成長をあたたく見守りながら子育てをしていくことが，不安を解消する最良の対策と言えよう。それとともに，本研究で明らかにされた幼児を持つ特に若い親たちのさまざまな悩みを真剣に受けとめ，将来にわたって安心して子育てに励むことのできるような社会的対策が十分にたてられることを切望する。

Table 5 10 items ranked high

順位	全 体	祖 父 母 と 同 居	祖 父 母 と 別 居
1	ご飯時の食事の量が少い	ご飯時の食事の量が少ない	ご飯時の食事の量が少ない
2	よく甘える	よく甘える	食事に時間がかかる
3	食事に時間がかかる	わがままである	皮膚が弱い
4	わがままである	食べ物に好ききらいが多い	よく甘える
5	食べ物に好ききらいが多い	食事に時間がかかる	食べ物に好ききらいが多い
6	よく泣く	よく泣く	わがままである
7	皮膚が弱い	皮膚が弱い	よく泣く
8	指しゃぶりをする	指しゃぶりをする	指しゃぶりをする
9	夜尿（おねしょ）をする	夜尿（おねしょ）をする	夜尿（おねしょ）をする
10	神経質である	神経質である	神経室である

要 旨

本研究の目的は、幼児の養育にあたっている親が、育児に関してどのような悩みや不安をいただいているかを調査することであった。資料として、奈良県家庭教育相談事業の一環として3歳児を第一子に持つ親を対象に実施されたアンケート調査のうち、過去10年間のデータが用いられた。

対象者全員に28項目からなる質問紙が配布され、郵送によって回収された。平均回収率は23.1%であった。主な結果は次のとおりである。

- (1) 「食べる量が少い」「食事に時間がかかる」「偏食がある」などの食事に関する悩みが10年間を通じて常に最も多かった。
- (2) 「よく甘える」「わがまま」など、情緒に関する悩みも目立って多かった。
- (3) 最近、「寝つきが悪い」「皮膚が弱い」という訴えが増加している。
- (4) 「ことばが遅れている」、「ほ乳びんを離さない」、「指しゃぶりをする」、「夜尿をする」、「転びやすい」など、2～3歳という年齢段階ならば当然と思われるような行動が問題視されている。
- (5) 祖父母との同居の有無によって親の悩みに違いが認められた。特に「甘える」と「わがまま」など情緒面に関する悩みは祖父母と同居している親に多かった。

引用文献

1. 牧野カツコ 働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要4 p. 67-76 1983
2. 牧野カツコ 〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討 家庭教育研究所紀要10 p. 23-31 1988
3. 木村汎 育児不安の社会的考察—援助システムの確立に向けて 大阪市立大学生活科学部紀要第33巻 pp. 1-13 1988
4. 千石保 母親と乳児の挙動に関する日米比較研究 家庭教育研究所紀要4 pp. 1-12 1983
5. 奈良県教育委員会 伸びよ3歳—家庭教育（幼児期）相談事業報告書— 1979-1988

(1989年9月27日受理)